

本号で特集の企画展終了後、同じスペースとケースを用いて、岡山大学附属図書館主催で同館収蔵の貴重資料を含む展示「黒正巖先生と津島キャンパス」展（平成28年2月5日～5月9日）が企画された。その際に問題となったのが展示環境である。先の学芸員課程企画展での展示資料は、通常の貸し出し図書および光に強い考古資料（土器・陶磁器）であった。しかし貴重資料として図書館収蔵庫で管理されている黒正巖氏の20世紀前半の著作や、歴史史料（羊皮紙）が並べられるとなると状況は異なる。そのため光（照度）と温湿度について、一般的に博物館で使用されている機器を用いた検討を行った。なお照度については古文書は50～100lx、温度については約20℃、湿度については紙で55～65%、羊皮紙で50～65%という基準がある<sup>(1)</sup>。

光については照度計（TOPCON・デジタル照度計・IM-2D）によって計測した結果、展示ケース上の天井光のLED電球を取り外すことにより、150～250lx程度まで抑えることが可能となった。それでも照度が高めなため、低い照度の箇所に実物を展示するとともに、実物展示の期間が短縮されることとなった<sup>(2)</sup>。

一方、温湿度に関しては、温湿度記憶計を用いて2つの展示ケース内を対象に、展示前の1月13日14:00から20日18:50の期間および実物展示中の2月4日12:00～2月12日16:30までの期間、記録を行った（いずれも10分間隔で計測）。事前の1月の計測では、展示ケース内の温湿度は以下となった。

南側ケース	平均温度 20.2℃（最高 23.4～最低 15.9℃）、平均湿度 33.8%（最高 41.3～最低 28.9%）
北側ケース	平均温度 19.7℃（最高 23.1～最低 15.4℃）、平均湿度 34.8%（最高 42.5～最低 31.2%）

展示ケースは、ノンエアタイト型で気密性が低く、天候による温湿度変化の影響を強く受けることが判明した。また特に文書を展示するには湿度が低い結果となった。したがって湿度を上げるために、貴重資料を展示する南側ケースには調

湿剤（アートソープ、55%rh）を2個ケース内に設置し、湿度の上昇と急激な変化の緩和が目指された。その結果が下記のグラフである。

南側ケース	平均温度 21.4℃（最高 24.1～最低 18.1℃）、平均湿度 39.2%（最高 43.9～最低 35.3%）貴重資料 調湿剤有り
北側ケース	平均温度 20.8℃（最高 23.6～最低 17.5℃）、平均湿度 34.5%（最高 39.4～最低 31.6%）

調湿剤の効果により、南側ケースの方が北側よりも湿度が上昇するとともに、湿度変化の緩和がみられた。それでもなお低湿度である点に問題を残すが、南側ケースの方が取蔵時の湿度と同等とはなっている。とはいえ、今後調湿剤等を追加するなど、改善を図る必要がある。

以上のように、今回の基礎的検討は、本来的な展示スペースではない場所での展示において、工夫次第で解消を図りうる側面とともに、その難しさを示したものと見える。岡山大学の豊かな学術資料にふさわしい展示・収蔵施設や大学博物館の設立が、資料と教育、広く社会にとって不可欠である。

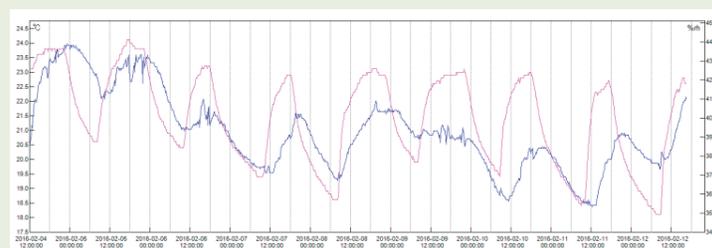
（光本 順）

註

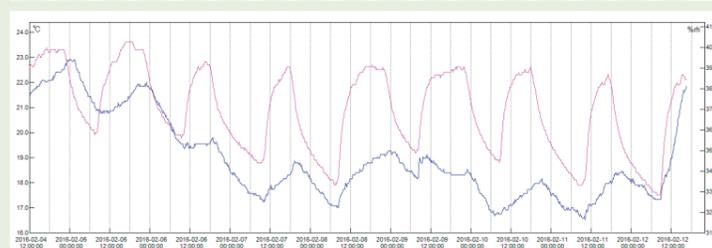
- (1)独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所編『文化財の保存環境』中央公論美術出版、2011年  
以下の文献の東京国立博物館の場合、古文書の照度を100lx（年8週間以内）とする。  
東京国立博物館編『東京国立博物館の保存環境（改訂版）』株式会社美術出版社、2013年
- (2)2/5～2/19、4/1～4/7の土日祝日を除く期間のみ現物展示予定。

検討にあたってお世話になった、岡山大学附属図書館職員の皆様並びに同館副館長の今津勝紀先生に感謝申し上げます。なお使用した機器は、文学部の支援により、2013・2014年度岡山大学戦略経費を受け、学芸員養成教育の充実が図られる中で購入したものである。

図書館展示ケース内の温湿度変化



南側展示ケース（調湿剤2セット入り）  
凡例 赤：温度(℃)  
青：相対湿度(%rh)



北側展示ケース（調湿剤なし）  
凡例 赤：温度(℃)  
青：相対湿度(%rh)

計測 2016年2月4日12:00～2月12日16:30まで10分間隔で計測 機器：株式会社佐藤計量器製作所 記憶計SK-L200TII  
グラフは機器に付属のソフトウェア「記憶系 for Windows」を使用して作成

# 06 March. 2016 学芸員課程 Newsletter

Newsletter from Course for Prospective Museum Workers, Faculty of Letters, Okayama University

編集・発行：岡山大学文学部学芸員課程（編集 光本 順）  
発行日：2016年3月9日  
文学部学芸員課程Web Site  
http://www.okayama-u.ac.jp/user/pmw

contents

特集 第3回学芸員課程企画展 光本 順 …… 1

博物館実習生による企画展報告 城永 妙子・竹内 里奈・串田 真緒・塩田 彩季・近藤 智香・十川 拓 …… 2・3

NEWS & TOPICS …… 3

コラム・図書館の展示環境 光本 順 …… 4

2015年12月15日（火）から22日（火）の期間に、第3回文学部学芸員課程企画展を開催しました。これは人文系博物館実習の一環で、実習生36名が企画運営したものです。本号の実習生による報告記事の作成もまた一連の教育活動の一部です。

会場は岡山大学附属図書館・中央図書館本館2階にある、木を基調とする新装なった学修スペース「サルトフロresta」です。これまで学芸員課程では、新課程の開始に伴い、2013年度より年1回の小展示を行ってきました。一方、岡山大学にはいわゆる大学博物館施設がありません。そのため学芸員課程の展示場所は、2013年度が文法経1号館1階リフレッシュルーム、2014年度が附属図書館本館1階ラウンジと変遷してきました。展示スペースの選択は、実物展示の可否を規定します。2015年度は図書館

の貴重書展示に実際に使用されてきた展示ケースを2台お借りすることができ、実物展示が実現しました。

展示に関しては、統一テーマ「岡大下暗し」のもと、2つのケースそれぞれに小企画を設定しました。内容については学生ならではの視点が見られる一方、展示の目的や見せ方について、議論を深める余地もありました。しかし、限られた期間における実践的グループワークから得られたものもあったのではないかと思います。

このたびの展示にあたっては、会場と展示ケースの提供をはじめ附属図書館の職員の皆様にお世話になりました。また展示資料の借用において、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターと岡大学生協、岡山大学附属図書館にご協力いただきました。記して感謝いたします。

（文学部准教授 光本 順）



完成した展示

# 特集 第二回

# 文学部学芸員課程企画展

# 博物館実習生による企画展報告

特集

## 準備

今回の企画展は人文系博物館実習を履修している学生を中心に10月から準備がされました。展示実践の一環ということで私たち実習生は「岡山大学に何らかの形でかかわる内容の展示をつくる」に沿って展示を考えました。その後6班に分かれて展示テーマをそれぞれ持ち寄り、その中からテーマを決めました。その結果、「器で見る！津島キャンパス五千年の歴史」と「東川篤哉特集！」に決まりました。そ

の後2回授業で話し合いの場を作り、アンケートやポスターの図案を考えていきました。博物館展示論など学芸員過程の授業で習ったことを活かしながら意見を活発に出し、よりよい企画展を目指しました。全体の話合い以外でも解説パネルの印刷など班ごとの役割を果たし、12月14日の設営に向けて動いていきました。

(文学部行動科学専修コース 城永 妙子)

## 企画展示1 器で見る！津島キャンパス五千年の歴史

「器で見る！津島キャンパス五千年の歴史」は、岡山大学津島キャンパスが立地する津島岡大遺跡について岡大の学生に知ってもらいたいという思いで企画した展示です。縄文時代中期(約5000年前)から近代にいたるまでの複合遺跡である津島岡大遺跡からは、様々な時代の考古資料が出土しています。今回はそれらの中から展示品として江戸時代の肥前磁器や鎌倉時代の青磁、古墳時代後期の須恵器、縄文中期の土器などを選びました。展示では学生に興味を持ってもらうために学食で使われている器を出発点として時間をさかのぼる形で展示品を配置し、歴史の流れを感じてもらえるように工夫しました。

(文学部言語文化専修コース 竹内 里奈)



## 企画展示2 東川篤哉特集！



岡大生に岡山大学についてより深く知ってもらおう！ということで、企画展の二つ目は岡山大学法学部出身のミステリー作家である東川篤哉さんについての特集をおこないました。普段は棚に並んでいる本をあえてケースに入れて展示することによって、本が価値のある資料であるということを訪れた人に再認識して欲しいという目的も込めての展示となっています。今回取り上げたのは、「烏賊川市シリーズ」から『私の嫌いな探偵』(2013)、「鯉ヶ窪学園探偵部シリーズ」の番外編『放課後はミステリーとともに』(2011)、『謎解きはディナーのあとで』シリーズ(2010-2012)の計五冊でした。いずれの作品もドラマや映画といった多方面のメディアミックスへと展開しており、誰もが「これ、知ってる！」と思わず目を向けてしまうような展示になっていたのではないのでしょうか。

(文学部哲学芸術学専修コース 申田 真緒)

## 企画班の工夫

「器で見る！津島キャンパス五千年の歴史」の準備では、まず資料を事前にリストアップし、交渉・手続きをした上で資料の所蔵元である岡山大学埋蔵文化財調査研究センターに資料をお借りしました。貴重な資料であるため資料を運ぶ際は梱包に気を付けました。設営した時は、大きな資料もあるため配置に苦しみました。「東川篤哉特集！」では、資料を図書館から借り、展示しました。展示ケースに配置する際は、どの角度からなら見やすいかなど、並べ方をいろいろ考えて工夫しました。

(文学部歴史文化専修コース 塩田 彩季)



## アンケート結果・分析

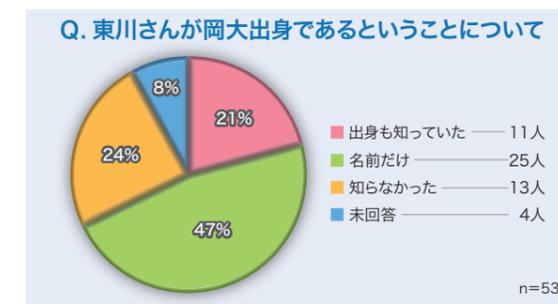
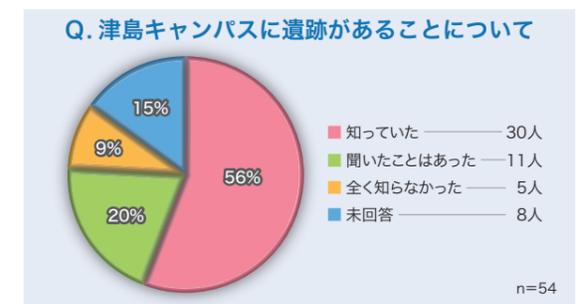
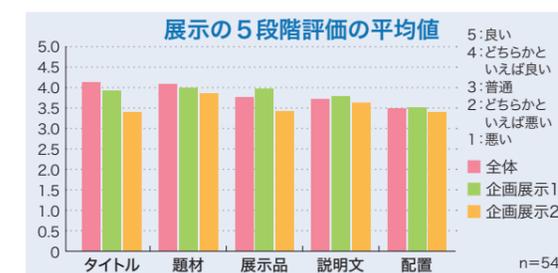
先日行われた「岡大下暗し-第3回岡山大学文学部学芸員課程企画展-」について、ご来場者の方々にアンケートへのご協力をいただきました。

右の棒グラフは、タイトルや題材といった項目を来場された方々に5段階で評価していただき、それらを集計したものです。今回の「岡大下暗し」全体については、ほとんどの方が面白かったと回答し、企画展示1・2それぞれの内容もおおむね良いという結果となりました。また、アンケートの中でいただいた展示に対する意見として、「解説がわかりやすい」、「興味を引かれた」というものがある一方、「文字が多く見づらい」、「資料が少ない」、「資料の配置方法や展示会場を改善した方がよい」等の厳しいものもありました。企画展示1「器で見る！津島キャンパス五千年の歴史」に関するアンケートは下段左の円グラフで示しているように、「津島キャンパスに遺跡があることを知っていたか」という問いに対し「知っていた」と答えた人が過半数でした。これは博物館展示論の講習生が多く訪れたためと考えられます。企画展示2「東川篤哉特集！」は下段右の円グラフ

で示しているように、東川さんが岡大出身であるということを含めて知っている人は意外と少ないということが印象的でした。この企画展は学芸員課程の学生が手掛けたものであるということで、来場者のほとんどが岡大生でした。今後、学内・学外を問わずより多くの方に展示を見ていただくためには、企画展の周知方法も検討する必要があると感じました。

アンケートにご協力いただいた皆様、この度はありがとうございました。

(文学部歴史文化専修コース 近藤 智香)



## まとめ

今回企画展は、展示の企画から設営、そして撤収といったように全体の作業を学生が主体となって行いました。展示を企画することは、実際行ってみると非常に難しいものであり、ただ陳列するだけにならないか、この資料を展示する意義は何であるかといったことを試行錯誤しながらテーマ選定を行いました。展示する資料が確定した後もそれを借用する手続きやポスター等の作成と各々が限られた時間の中で企画展に向けた作業に取り組んでいきました。企画展終了後は資料等を撤収し、アンケートの集計作業を行いました。自分たちの意図が伝わった部分があれば、改めて考えさせられる部分もあり、展示の面白さや難しさを再認識する結果となりました。この実習では、どのような流れで展示が行われるのか、それにはどのような苦勞があるのかといったことを実際に体験し、学ぶことができました。今回得た知見を今後活かしていきたいです。

(文学部歴史文化専修コース 十川 拓)

## NEWS & TOPICS

### 第6回文学部学芸員課程ランチタイム企画トーク・ミュージアム開催

2016年2月18日に文学部学芸員課程ミュージアム教育実習室にて第6回「トーク・ミュージアム」を開催。美術史が専門の鐸木道剛先生(文学部)より、「聖なるものを見せるーあるいは展示不可能性について」と題してお話いただきました。新約聖書以来、聖なるものを見せる行為が展示行為の根幹に存在することを指摘。これからの美術館展示の意義に思いをめぐらすひとときとなりました。



特集